

氏名	酒井正彦 さか い まさ ひこ
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第857号
学位授与の日付	昭和55年11月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	内視鏡的膵胆管造影法におけるX線シネ撮影の有用性 —その臨床的意義および研究手段としての展望—

論文調査委員 (主査) 教授 戸部隆吉 教授 鳥塚莞爾 教授 内野治人

論文内容の要旨

I 緒言 膵胆道系に関する各種検査法の進歩に伴い逆行性膵胆管造影法 (ERCP) の必要性はさらに増加している。しかしある瞬間の形態を静的に捉える従来の方法には限界がある。このため、X線映像を映画撮影 (以下シネ撮影)、ビデオ録画にて記録し、動的に繰り返し検討する方法を試み、有用性を認めたので報告する。

II 対象および方法 対象 1977年9月より1979年5月まで天理病院にて ERCP を施行した187例中、108例に本法を施行した。

対象症例は、総胆管結石を伴う胆道結石症が31例と最も多く、86例が胆道疾患、12例が膵疾患、10例が膵胆道著変なしの例であった。

検査方法 X線装置は心カテ用 Cardoskope U を、読影には Targarno 3500 を使用した。また通常の前処置による ERCP に Caerulein 静注を加え、胆道末端部の反応を観察した。

乳頭機能判定 排泄時の胆道末端の形態、総胆管の形態に加えて、シネによる末端の動きの検討を行い、乳頭機能を正常および3段階の異常 (Grade 0~Ⅲ) に分類を試み、検討した。

シネ撮影の効果判定 広義には全例に有効性を認めたが、一定の基準を設けて本法の有用性を検討した。

III 結果 効果 8例に特記すべき効果を認めなかったが、100例については1項目以上、合計231項目について効果を認めた。

良悪性鑑別では、総胆管結石症4例を含む良性疾患7例、胆管癌6例、胆嚢癌、膵癌各2例の悪性疾患10例につき有効であった。

閉塞性黄疸を来した38例を含む64例につき乳頭機能判定を行い、結石を認めない13例の異常例の手術要否を判断できた。

肝内結石症や肝硬変症を含む23例に良好な肝内分枝像を得た。

7症例9回の胆道術後視察を本法にて行い、動的記録を得た。

本法にて異常を認めた55例は、術後、経過観察後の再検時の比較資料として有用であり、結石と気泡の

鑑別例も7例認められた。

効果と撮影部位 撮影部位は、検査目的、予想される疾患、検査中の所見などにより選択された。良悪性鑑別目的の場合、閉塞例では注入像が有効、胆道末端不整例では排泄像が有効であった。

乳頭機能は胆道排泄像で検討されており、46例は Caerulein 静注に対する反応が撮影された。膵管排泄像も貴重な記録と思われた。

肝内分枝像検討には、注入時、体位変換時の撮影が有効であった。

術後視察は、施行された手術内容により、撮部位が選ばれた。

乳頭機能と手術 判定した Grade と最終診断を見ると、胆嚢結石症では Grade 0～I、総胆管結石症では Grade II～IIIが多く、相関が認められ、機能異常のみでも Grade IIIは手術適応と考えられた。

IV 考 按 本法による動的な記録、再現は、ERCPの微細な検討を可能とし、経過観察例や集積した症例の比較検討に有用である。

膵胆道に変形ある症例では、流れとして記録される造影剤の動きの検討がその解析に有用であり、動きの検討による不整な壁の良悪性鑑別、乳頭閉鎖不全時の逆流と閉塞による逆流の鑑別などが可能であった。また、結石と気泡の鑑別は極めて容易であった。

肝内分枝像の造影剤の連続的な濃度変化を繰り返し検討することは、分枝1本毎の詳細な検討を可能とし、薬剤併用 ERCP の効果を増強する。

乳頭機能異常例、膵管への胆汁逆流例の膵管像の経過観察、症例蓄積は、乳頭機能と膵炎の相関を明らかとする資料となる。本法による術後再検は、吻合口径、胆汁や膵液の動態観察に有用であるが、種々の疾患、乳頭機能例を、術式別に追跡することにより、その成績と術前のシネとの対比から術式選択基準の検討が可能となる。

経費増大、被曝量増加の問題もあるが、本法の効果は大きい。

V 結 論 ERCP 施行時のX線像の映画撮影は、現在でも臨床的に有用な方法であり、将来性のある検査方法である。

論文審査の結果の要旨

逆行性膵胆管造影法 (ERCP) にX線映像の映画撮影を導入、臨床的に有用性を検討した。造影剤注入時、排泄時など撮影部位は予想される疾患や検査中の所見により選び、胆道結石症および胆道、膵疾患総計187例中108例に施行した。その結果、閉塞や狭窄のある例では造影剤の逆流が鮮明に記録され、注入圧による動きや排泄時の蠕動の観察からも良悪性の鑑別は容易であった。乳頭部の排泄時の動きの分析は、その機能的状態の把握を可能とし、研究上も有用であるが、治療法別に、手術例では術式別に、経過観察や手術前後の比較を積み重ねることにより、最適の治療法、手術々式を決定する資料が得られ、現在までの最終診断、乳頭機能、手術有無の相関を明らかにした。本法の有用性は動的な再現性に依るが、気泡と結石や膵管途絶との鑑別は非常に容易であり、肝内分枝像も繰り返し再現するならば、種々の濃度の段階での一本毎の検討が可能であった。

以上より、本法シネ ERCP は臨床的に極めて有用であり、将来性のある検査法であり、胆膵管系疾患

の消化器内視鏡学，臨牀的動態解明に貢献し，疾患の診断治療に寄与する所が多い。
したがって本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。